

巻頭言

安心できる安全対策

—今こそ、参加型イネイブリング・アプローチを—

堀野 定雄



筆者はかつて、建設産業の特徴を簡潔に表現した数字は「七五三」ならぬ「七四二」とであると指摘したことがある。きっかけは旧建設省建設経済局長の「ユーザ仕様高度化推進技術委員会」の冒頭挨拶であった。年間220件もの死亡事故が頻発したバックホウなど建設機械の操作方式統一で、安全性向上を図る大事業を展望する判りやすいメッセージであった。

局長は全産業に占める建設産業のGNP貢献比率は2割なのに死亡労災貢献比率は4割もあり不名誉である。死亡災害を経済貢献比率並みの2割に減らそうと極めて平易で明快な数値目標を示したのだ。7割については筆者が追加した。総務省が年末に公表する企業の使途不明金統計で、建設産業だけで全産業の7割を占めるという不名誉な数字である。日本の建設産業はその発展基盤を技術努力よりも営業努力にしている実態を雄弁に表す。社会が注目した談合文化の構造的断面とも言える。

あれから10年以上経ち、GNP貢献比率は15%に落ち込んだ。局長論理を応用すれば、死亡災害も全産業の15%まで削減してバランスを取らねばならない。

建機の操作方式は、官民一体努力で人間工学原理に基づくISO方式を導入するなどして標準化を全面的に達成した。それなりに成果は上がり災害統計も改善した。しかし、全産業1,658名に対して建設業は607名で37%で依然4割弱で顕著な改善はない（平成15年）。建設産業も努力したが他産業も努力したからである。よほど有意に抜本的な改善努力をしなければ建設産業の安全性改善は他産業に追いつかない。

努力の一環として、新しい発想を採り入れた安全対策ツール「建設機械施工安全マニュアル」を開発した。省庁再編後の新組織として国土交通省総合政策局建設施工企画課は縁の下で力持ちに徹し、建設機械施工環境・安全対策委員会を協議の場と位置付け、GIA方式（Government, Industry, Academies）でリスクマネジメント体制を構築する。これは施工現場で出

来ることから実行していこうという主旨の参加型でローコスト、アクション志向のチェックリストを駆使した安全性改善方法である。

筆者も理事をしている国際人間工学連盟（IEA; International Ergonomics Association）と国連機関ILOが協同出版した「人間工学チェックポイント」（1996年）（和訳；労研出版部（1998））の評判がよく、人間工学著作の国際ベストセラーである。製造業対象に出版したこのチェックポイントを参考に建設現場用にこの施工安全マニュアルを開発した。広範なGIA関係諸機関の理解と協力のおかげで素案が完成し、フィジビリティスタディを推進中である。

これは国際的に広範囲に普及した参加型人間工学改善手法をベースにしている。全チェック項目は現場でその当該アクションを実行するかしないかを選択する。グループワークでチェックに参加することにより自覚的、主体的な作業改善が進行し、結果として安全性が有機的に向上する仕組みになっている。関係者全員が参加するので結果として人間の絆を確認した上で持続的に改善が積み重ねられていく。手元にある資源を有効に活用し、出来ることから改善実行していくので無理なく実績が出る。改善意欲が充足し安心して皆で取り組める効果がある。短期・長期の課題整理も結果として出来る。この種の改善理念をイネイブリング手法（Enabling Approach）と呼ぶ。ボトムアップ方式とも言える。

災害は人間、機械、環境と言った複合要因で起こる。この科学的枠組みで古典的な「事故不注意論」を乗り越え、更に、今注目される六本木ヒルズの最新ハイテクビルで起きた自動回転扉死亡事故に象徴される組織事故にも十分対応できるものである。この広範な努力の拡がりでも局長が掲げた目標を達成したいものである。

—ほりの さだお 神奈川大学工学部経営工学科助教授；

建設施工の安全対策検討分科会長—